

日本の高齢者向けサービスと高齢者住宅Ⅴ

今回で5回目となる「日本の高齢者向けサービスと高齢者住宅」

今回は、アジア(特に中国や韓国、台湾等)から注目されている高齢者施設をご紹介します。

日本は世界で類をみないスピードで高齢化が進んでいる。

日本の65歳以上人口は、1950年総人口の5%に満たなかったが、1970年に7%を超え、さらに、1994年には14%を超えた。高齢化率はその後も上昇を続け、2024年9月16日の敬老の日の発表では、65歳以上の人口は3625万人となり、総人口比は29.3%となった。

「団塊の世代」が75歳以上となる今年2025年には、3,653万人に達すると見込まれている。

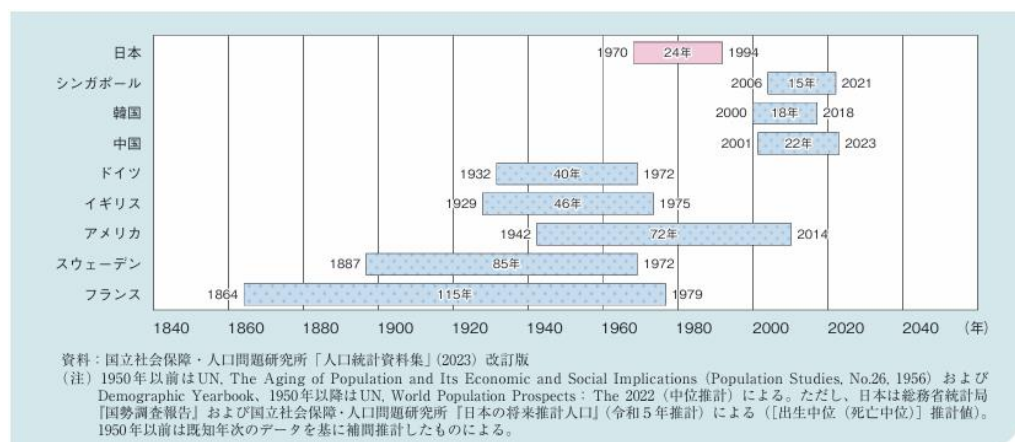
総人口が減少する中で65歳以上の者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2037年には国民の3人に1人が65歳以上の者となると見込まれている。

(2043年に3,953万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されている。)

平均寿命が延び、それとともに元気な高齢者も増え、10~20年前の高齢者と比較すると10歳程度若返っているという研究報告もあるが、75歳以上の後期高齢者になると認知症の高齢者も増加し、前期高齢者と比較すると要介護者も8倍程度となる。総人口に占める75歳以上人口の割合は、2070年には25.1%となり、約4人に1人が75歳以上の者となると推計されている。

世界に類をみないスピードで日本は高齢化したと先述したが、高齢化の速度について、高齢化率が7%を超えてからその倍の14%に達するまでの所要年数(倍加年数)によって比較すると、日本は24年、フランスが115年、スウェーデンが85年、アメリカが72年、比較的短いイギリスが46年、ドイツが40年である。

アジア諸国に目をむけてみると、韓国が18年、シンガポールが15年など、今後、一部の国で日本を上回るスピードで高齢化が進むことが推測されている。



筆者が10年前に韓国と台湾の高齢者施設を何件か見学した際は、日本との差は大きくあり、2016年から2020年までシンガポールに在住していたが、高齢化への危機感を感じられなかった。

しかし、ここ数年アジア諸国の高齢者関連の実情や意識は変わり、高齢者関連のデジタル化やロボット導入等のスピードも上がってきている。事実、韓国の関連事業者を日本の高齢者施設にアテンドした際に、韓国の方が進んでいる部分もあるとの声も聞かれた。

そのような中、アジアを中心に海外の見学者が絶えない高齢者施設が日本の大田区にある。

数か月前にも、日中韓三国保健大臣会合に参加する大臣等が視察に訪れた。

それが、社会福祉法人善光会(住所:東京都大田区東糀谷 6-4-17)「サンタフェガーデンヒルズ」である。

この善光会のサンタフェガーデンヒルズは筆者だけでも、数回、アジアの大手生命保険会社の幹部等を案内している。

一昨年、日本の大手保険会社が介護最大手の企業を買収したこともあり、海外保険会社も日本の介護事業に色々な意味で興味・関心があることには間違いない。

平均寿命の伸びや高齢化で介護市場拡大が見込まれており、介護業者が持つ顧客基盤を生かして生保事業との相乗効果を考えているものと思われる。

今回、紹介する善光会のサンタフェガーデンヒルズの概要から紹介する。

- ・法人名；社会福祉法人 善光会
- ・設立年月日；2005年12月7日
- ・代表者；理事長 西田日出美
- ・本部所在地；東京都大田区東糀谷六丁目4番17号
- ・従業員数；511名（2022年現在）
- ・基本金；825.5百万円（2018年度）
- ・拠点；国内最大級の複合施設サンタフェガーデンヒルズをはじめ東京都大田区を中心に9拠点を展開
- ・理念；オペレーションの模範となる業界の行く末を担う先導者となる

善光会の想い「介護サービス利用者様が自ら感じたり考えたり行動したりし続け、最後まで人間らしく生きることをサポートする」



国内最大級の複合福祉施設サンタフェガーデンヒルズをはじめ大田区を中心に9拠点を展開

なぜ、海外からの視察が多いかというと、理由はいくつかあるが、介護テクノロジーの活用が進んでおり、企業との研究・社会実装が行われている点であると思われる。

介護ロボット；見守り「眠り SCAN／パラマウントベッド」「HitomeQ ケアサポート／コニカミノルタ QOL ソリューションズ」その他、排泄では「DFree／DFree」、入浴では「ピュアット／金星」、移動・移乗、コミュニケーション、介護 ICT、その他、様々な介護テクノロジーを活用している。

■介護テクノロジーの活用例① 眠り SCAN

睡眠センサー「眠り SCAN」を活用して利用者様の睡眠状況を遠隔リアルタイムで把握し、巡視・訪室を効率化している。更に利用者様の睡眠習慣を把握し、生活の質を向上させるためのケアを実践している。

利用者様の睡眠状況をリアルタイムで把握し不要な巡視を削減、訪室する際もタイミングを調整。起き上がりや離床のアラート機能も活用睡眠習慣を把握した上でその方に合った介護の方針を検討し（日中活動の変更、午睡の調整など）生活の質の向上のための PDCA を実践している。

入居者はある程度、自分のリズムを持って生活している中、個別対応が難しい場合もある。その人の生活を分析することにより、眠りや排泄の実態が数値として見える化でき、利用者に負担のないケアが実現している。同時に職員の負担も軽減している。

■介護テクノロジーの活用例② スマホとインカム

今となっては施設内での職員のやりとりをインカムで行うところが増えたが、善光会での骨伝導のインカムの導入はとても早かった。

職員は勤務中、業務用スマートフォンとインカムを身につけている。スマホには様々なアプリがインストールされており、見守り機器からの通知や他職員とのグループ通話を Bluetooth で接続し、インカムを通して聞くことができる。

個室の天井センサーが転倒・離床等を検知しアプリに通知し、リアルタイムの映像を確認することが可能である。ナースコール機能もあり、職員が迅速に対応できる。

骨伝導のインカムを利用することで、利用者の声も聞き逃すことがない。

■介護テクノロジーの活用例③ SCOP

介護事業 DX システム SCOP を活用することで、介助したその場ですぐ記録をつけることが可能になり、紙のメモやその転記作業が不要になった。また申し送りも SCOP 上で完結するため会議開催が不要になった。

介護事業者の資料はまだ紙が多いのが現状である。その中で、善光会の職員スペースには紙が無く、PC や事務機器があるのみ。スマートフォンやバッテリーがずらっと並んでいたことに 7、8 年前に驚いたことを今でも覚えている。

このスマート介護プラットフォーム「SCOP」の開発・導入と、「スマート介護士」という認定資格の創設が、アジア圏からの見学が絶えない理由と考える。

今回は、この「SCOP」シリーズの詳細を紹介する。

参考資料；

内閣府；令和 6 年版高齢社会白書

総務省統計局；統計トピックス No.142 統計からみた我が国の高齢者－「敬老の日」にちなんで

厚生労働省；第 9 期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について（令和 6 年 7 月）

厚生労働省；介護保険事業状況報告の概要（令和 6 年 7 月暫定版）

日本の高齢者向けサービスと高齢者住宅 V

シニアライフデザイン代表 シニアラフデザイナー 堀内裕子

桜美林大学老年学総合研究所 連携研究員

日本応用老年学会常任理事